

廉想渉の初期作品に見る日本植民地下の 「近代」朝鮮認識

— 『暗夜』 『標本室の青蛙』の家族像を通して—

蔡 永 姪*

目 次

はじめに

I 『暗夜』 (1922) — 封建的な「家」の終焉

1-1. 「真理」と「遊戯」の狭間で

1-2. 「芸術」と「愛」の相関関係

1-3. なぜ「愛」なのか

1-4. 「墓場」の朝鮮

II 『標本室の青蛙』 (1921) — 「新家庭」に込められた「近代」の可能性

2-1. 青年の「世界の果て」への旅

2-2. 平壤・大同江での「夢」が示す時代認識

2-3. 「三回建ての洋屋」が示す可能性

2-4. 金昌億の個人史と朝鮮歴史

2-5. 旅の帰着点が示すもの

まとめに

はじめに

廉想渉(임상섭: 1896年~1963年)は、日本に併合され10年が過ぎ独立の
望みも不透明になった1920年代の入り口で、植民地下という朝鮮の近代をどのように眺めて

* 한밭대학교 강사 근대문학

いたのだろうか。本論文では、韓国近代文学の近代性がどのような様相で貫徹されているかを最もよく知ることのできる作家とされる廉想渉の初期の2作品に描かれた人物達の家族をめぐる葛藤を通して、「近代」日本と植民地下という朝鮮の近代の狭間で悩む廉想渉の時代認識を見ていくことにする。

廉想渉は1897年8月、朝鮮が大韓帝国として国号の変わる年に現在のソウル、当時の漢陽に8人兄弟姉妹の四番目として生まれる。1910年朝鮮が併合される時期に京城の普成中学に入学するが、2年の半ばで1913年16歳の時に日本へ渡る。1918年、22歳で慶応大文科予科に入学するが1学期のみで退学し、1919年3月1日に起きる「三・一独立万歳運動」を大阪で迎え、3月19日、在大阪朝鮮人労働者一同を集めて天王寺公園で万歳運動支援を主導しようとしたことで検挙される。禁固10ヶ月の判決を受けるが、6月に無罪判決で釈放される。1920年「東亜日報」の創刊記者として帰国して約1年後に世に出る。廉想渉は記者生活とともに同人誌の創刊に励むのだが、6ヶ月で記者生活も辞め、井州の五三中学校の教師を一年間努める。この教師生活の時期に日本留学時に感受した日本大正期文壇（白樺派）の磁場の中で習作を試みたのが1921年のデビュー作『標本室の青蛙』であり、一躍文壇の注目を浴びることになった。

廉想渉の作品には、特に初期作品において父母世代の前近代的な「家」を批判する主人公が姿が特徴的である。ここには、「家」をめぐる葛藤が民族の存続問題として置き換えられる廉想渉の時代認識の一つの手法がある。¹⁾

さて、廉想渉の初期作品では登場する知識人主人公が倦怠、憂鬱、酒、煙草などに溺れ、無気力で目標とすべき焦点を失った姿である。このような登場人物の姿の背景には、「三・一独立万歳運動」が失敗に帰した陰があり、また日本大正デモクラシーの自我主義的近代思想と帰国後の朝鮮の有り様が対比される廉想渉の時代認識が絡んでいる。作品では朝鮮の状況が「墓地」として作品に描かれるのだが、そこには日本で感受した近代と位相の異なる朝植民地下の朝鮮の現実との間に引き裂かれ悩み迷う廉想渉の精神状態が連動している。

ここで本論に入る前に廉想渉の初期作品をめぐる先行研究を確かめたい。²⁾

廉想渉の初期作品は『暗夜』（1922年1月）、『標本室の青蛙』（1921年7～8月）に加えて、翌年に書かれる『除夜』（1922年2～6月）を入れて初期3部作として評価されている。³⁾この初期3部作は韓国近代文学の「起源」の探索につながると指摘

1) 金慶洙『廉想渉長編小説研究』一潮閣、1999年2月、86頁。ここで金慶洙は廉想渉の小説の主要空間として、「首都京城の中産階級の家族」を描き、「家族主義」が小説構成の一つの根幹をなしているとし、その構成方法として「家と社会」の平行性が見られると指摘している。

2) テキストは『廉想渉全集初期短篇』第9巻、民音社、1987年を用いた。本論文では『암야』『표본실의 청개구리』作品名を『暗夜』『標本室の青蛙』の日本語に訳し、テキスト本文の引用も筆者の日本語訳を使った。なお、韓国文献の引用も筆者の日本語訳による。

されている。4)金禹昌は「他の作品『標本室の青蛙』の外——引用者注)においても廉想渉の関心は常に「新しい可能性」にあり、少なくとも家庭の不可能性に対する教訓が内包されていると見られる」と述べている。5)また、金ハンシクは、『標本室の青蛙』の狂人、金昌億について「本質的には同時代の敏感な問題を一身に背負っている問題的人物ではない。彼を抑圧する大きな原因は家庭的事象にあり、彼が主張する東西親睦会、世界平和などの言及も、作品内では特別な関連なしに主張しているに過ぎない」と指摘し、「初期作品が見せる変化は韓国近代文学の近代性が志向する方向を知る重要な資料」的価値があると指摘している。6)ともに初期作品における主人公達の形象に家族的事柄が絡んでいると指摘しているものの、その家族的な事柄と作品世界との関係は問われていない。

そこで本論では作品に現れた家族的事象の解析が廉想渉の時代認識を、韓国近代文学の近代性を究明できる有効な分析軸として考えられることを前提にして論を進めることにする。

I 『暗夜』 (1922) 一封建的な「家」の終焉

最初の習作となる『暗夜』の草稿が書かれたのは帰国前年の1919年10月頃とされるが、当時東京の朝鮮人留学生の機関紙である「学之光」に掲載を断られ世に出ることはなかった。7)

『暗夜』における評価について、金允植と李ボヨンの二人の対蹠的な見解がある。金允植は日本留学から帰国後の廉想渉自身の「内面風景」としての作家の資料的な価値のみで、『暗夜』の青年主人公の憂鬱・神経症の描写には「朝鮮的現実」との関連がないとしている。8)一方、李ボヨンは作品に現れた政治的要素に注目している。李光洙

3) 『暗夜』(1922)は先に書かれるが、発表は『標本室の青蛙』(1921)より後である。前2作品が男性主人公の生の模索であるならば、『除夜』は新女性の生の模索である。本論では男性主人公の生き方を探った2作品のみを分析対象にした。

4) 金允植『廉想渉研究』ソウル大学出版部、1987年1月、139頁。金允植は「この作品の性格を明らかにすることは、韓国近代小説の起源を明らかにすることにつながるため、綿密な検討が必要である」(139頁)と指摘している。

5) 金禹昌「リアリズムへの道」『廉想渉全集初期短篇』第9巻、民音社、1987年、437頁

6) 金・ハンシク「現実の具体性と近代的主体の成立」『廉想渉小説研究』金種均編、国学資料院、1999年1月、493頁

7) 張・ソクジュ『20世紀韓国文学探検1900~1934』シゴン社、2000年11月、172頁

8) 金允植、前掲書、169頁。「廉想渉を憂鬱にさせたその神経症、憂鬱症、狂症は朝鮮的現実とは何の関連がない。それは現実から来たのではなく、白樺派の芸術から来たものだからである」と述べている。

の『無情』の登場人物が政治的な現実を目を向けることのない「功利的人間」であるの
に比べ、『暗夜』は「亡国による実存的不安を抱えた人物」が描かれていると見てい
る。この意味において『無情』が近代小説の「外向的出発」であるならば、『暗夜』
は「内向的出発」であると言いき、廉想渉の作家的出発には祖国喪失から生じた「政治
性の強い自我覚醒」による「虚無意識」があると指摘している。⁹⁾二人の対蹠的な見解
を総合すると、『暗夜』は廉想渉の帰国後の個人の状況を反映しているとともに、また当
時の植民地現実に対する認識が交差する時点で書かれた作品と見ることができる。

ところで、先行研究では、主人公が見せる悩みに対して、「芸術と恋愛」問題に悩む
姿は真理へ至る通路として見出されているものの、その具体像は掴めないと指摘してい
る。¹⁰⁾この問題を解決する手掛かりとして本論では、主人公が自ら触れた有島武郎の
『生まれ出づる悩み』の作品世界が多くを示唆していることに注目して検討する。¹¹⁾

1-1. 「真理」と「遊戯」の狭間で

物語の主人公は日本帰りの知識人である。主人公の帰国直後と思われる状況の下で
の「このごろの苦痛」に悩む主人公の半日の姿が描かれている。

主人公が、部屋に閉じこもり思索に耽って悩んでいる様子、そしてその思索の内容を示
すことでこの物語は展開されていく。思索に耽っては家を出て、散歩する行動を二度繰り返
した主人公は、三度目は家を出たまま暗闇に消えるが、ここに主人公の思索の方向性が
示されている。

主人公の思索内容は曖昧模糊としているが、それは主人公が読む有島武郎の作品『生
まれ出づる悩み』の作品世界と問答している形で展開していることに注目したい。この『生
まれ出づる悩み』を参照することで、主人公の思索内容の輪郭を確かめ、その方向性を
突き止めることができる。そこには作者の朝鮮社会に対する認識の構図があると考えられ
る。

主人公の「苦悩」は「真理」か「遊戯」かの問題として、今の状態は「遊戯」に過ぎ
ないことにある。主人公は、文学が「真理」を追究できる「事業」であると、有島武郎の
『生まれ出づる悩み』における主人公の姿——文学者を目指す人物と、生活と苦闘しな
がら画家を目指す青年の芸術に向けられた姿勢——を通して見出しており、結末で主人
公が家から出て消え去る行動の意味をも暗示している。

9) 李・ボヨン『乱世の文学』（廉想渉論）イェリム企画、2001年3月、10頁。「明治時代の日本自然主義文学
者達の虚無意識が天皇制の抑圧政治に由来しているにもかかわらず非政治的な性質のものである反面、廉想
渉の虚無意識は“人心”の“帰趨”を亡くした祖国喪失に由来している。特にそのような暗澹たる現実が彼の政治性
の強い自我覚醒を催した」としている。

10) 金・ハンシク「現実の具体性と近代的主体の成立」、前掲書、479頁

11) 『生まれ出づる悩み』のテキストは、『有島武郎全集』第3巻、筑摩書房、1980年（昭和55）を用いた。

具体的に、『暗夜』と『生まれ出づる悩み』の両作品の人物の姿を見てみると、つぎの引用文のように芸術に向けられた思いと悩みが酷似していることが確かめられる。

① 「……芸術だの、なんだの騒いでも結局は物質生活の奴隷に過ぎない。所詮、苦悩というのも結局は食っていけないからではないか。人間の心の根底からじりじり燃える人間苦というものは目を洗って見てもない。…（中略）…ニセ芸術家ではないか。（中略）我々が一度でも一生涯の事業の為に、自己の芸術の宮殿の為に……深刻で永遠な苦悩の為に生死の問題であると叫んだことがあるか？……」（『暗夜』、56頁）

② 私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲ろうとする自分をひっぱたいて、出来るだけ伸び伸びした真直ぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようと藻掻いていた。それは私にとってどれ程喜ばしい事だったろう。と同時にどれ程苦しい事だったろう。（『生まれ出づる悩み』、401頁）¹²⁾

引用文①の『暗夜』では、文学者を目指す主人公及び画家仲間の青年が真摯さ、真剣さ、誠実さを欠いて「遊戯的」で、「苦悩！人間苦！」の探求に至っていないと批判している。引用文②の『生まれ出づる悩み』では、「人類の意志と取り組む」文学者の心境と、画家青年の漁夫としての運命に「服従」しつつも絵を書き続けている姿に、文学者が共感を示している内容である。さらにこの青年画家の「一人の漁夫としての一生」か「一人の芸術家としての一生」かと悩む姿は、「凡ての人の心の奥底にある」もので、「この地球の上のそこここに君と同じ疑いと悩みを持って苦しんでいる人々」の「魂が目覚め」ようとする姿であると、作者は「地球の隅っ子」の人に呼びかけているのであり、『暗夜』の主人公はこの呼びかけに答えようとしていると見ることができる。

『暗夜』の主人公は、その上でさらに問いつづける。『生まれ出づる悩み』の文学者と青年画家を取り巻く「運命」としての現実と相違する自分の運命としての現実、亡国の現実へ意識が向いて行く。主人公にとって、今の「遊戯的」な状態は否定されるべきことで、異論の余地はないと主人公は思う。

1-2. 「芸術」と「愛」の相関関係

12) 1918年の有島武郎の好評作。1918年（大正7）3月から『大阪新聞』『東京日日新聞』に連載され、同年8月6日に完稿。有島武郎著作集第6輯『生まれ出づる悩み』（1918年9月、叢文閣刊）に『石にひしがれた雑草』と併せて収録される（『有島武郎全集』第3巻「解題」685頁）。金允植は廉想渉が1919年10月、日本で読んでいたと推測している（金允植、前掲書、172-175頁）。作品中の翻訳題目は『出生の苦悩』となっている。

主人公の思索は、何のための「真理」探究なのか、その理由を自問する。そして、「真理」の探求のための「衝動」がないことに思索の焦点が移動し、より重要なことは「愛」の問題ではないかと導き出す。なぜ、「芸術」へ向かうことと「愛」の問題は関係し合うのか。ここに『生まれ出づる悩み』の主人公には見られない『暗夜』の主人公の問題の特徴がある。

「真理の探究者よ！」と絵を書くように一文字一文字書き込んだ。しばらく見つめては（中略）しかし、何故、何のための、探求なのか。探求することが有意義であるというならば、探求しないことも有意義であるとは言えないか。また、探求しないことが無意義であるとすれば、探求することも無意義であると言えまいか……。

その欲求さえもない私、衝動の酵母が死んでしまった私——愛の尊影を焼失した私、一切の情火の灰燼だけが残った者に、意義あるものがあろうか。その何が壮美で厳粛に見えるだろうか……。 (49頁)

このごろの彼のもう一つの苦痛は、意識的でしか人を愛することができないということだ。… (中略) …彼にとっては条件無しでは、人を愛することができないのが一種の苦痛であると同時に悲哀であった。 (52頁)

二つの引用文から、『暗夜』の主人公が芸術を通した「真理」の探究に、「何故、何のための、探求なのか」と、その「意義」を問い、「愛の尊影」を失った者に、「芸術」の意義は見出せないと、「芸術」と「愛」の関係を導き出す。この二つの関係は、全面的に「否定」も「肯定」もできない、どちらか一方だけを取捨することのできない関係として、離れることのできない「同伴」関係であると言う。そこで「愛」を焼失している今、どうすればいいのかと、悩みの構図がずらされていく。

1-3. なぜ「愛」なのか

何故、主人公は「芸術」と「愛」の問題を相関関係にあるものとして見出しているのだろうか。主人公の願いは「愛の尊影」の成就にあるが、それを「焼失」していることはどのような意味なのか。ここに『暗夜』の主題と作者の「朝鮮的現実」を捉える視座を見ることができる。

主人公は自由結婚でない、すでに親の決めた婚約者のいる立場にある。愛の情熱を経由しない結婚相手がすでに存在しているという状況で、つぎの引用文は、婚約者の女性の写真に向い、主人公が一人で想念上の問答を繰り返している場面である。

① 「（結婚は）相手の顔も見たこともない男女が、一生の運命に姦淫的最後決断を宣告することだ。祝事だの、何だの、ありゃしない。仁川の米豆以上の賭博をしながら、やれ祝事だの、騒ぐのは、馬鹿騒ぎもいいところだ……」と、心の中で思った彼は、憤怒に

耐えかねた。(53-54頁)

②彼らの個性の自由な発現が、無理に抑圧されるのを恨み歎きながら、人生問題だの、厭世主義だの騒ぐのは、生活の困窮に対する哀訴を隠して、綺麗に飾り立てているだけである。(中略) 生の美しく純潔な情緒を発露する恋愛のために、深刻で永遠の苦悩のために、それは生死の問題だと訴えたことがあるのか。(56頁)

③このごろの彼のもう一つの苦痛は、意識的でしか人を愛することができないことだ。(婚約者は)可愛そうだ。不純な私が婚約者の純潔を汚す罪悪の代償としても、私は彼女を愛さなければならない。しかし条件無しでは、人を愛することができないのが、彼にとっては一種の苦痛であると同時に悲哀であった。(52頁)

朝鮮の現実問題として取り出されるのは、引用文①から見られるように、「人倫の大事」の「結婚」が「仁川の米豆以上の賭博」¹³⁾「姦淫的」という言葉で比喻されるように「商取引」の手段となっていることである。男女の関係は、引用文②のように、「個性」「自由」「恋愛」で結ばれる関係が理想とされている。ここから前近代的な価値の否定と同時に、新しい価値として「愛」を措定しているが、「恋愛」を通してではない、親によって決められた婚約者に対する主人公の思いは、引用文③のように、「商取引」ではないにしても純粹に「愛」を手向けることのできない、「条件」付きの「愛」であり、そのことに主人公は罪悪感を覚えている。

このような婚約者に対する思いが意味するのは、前近代的な価値も新しい価値もどちらも中途半端でその間に挟まれた状態と言える。「恋愛」という近代的理想を追うならば、写真を通して知る婚約者は主人公にとって価値はない。前近代的な価値観のみならば、③に見る主人公のように「愛」のないことを苦しめ、「不純」な思いとか、罪悪感を抱くことはない。「肯定」も「否定」もできないジレンマの中で、主人公が見出す答えは、「同伴者」として「愛さなければならない」という「義務」を自分に課すことである。

さて、婚約者の写真に「義務」を誓った主人公は、それを履行しようと、家を出て、朝鮮王朝の宮殿であった王宮の前で涙を溜めてそれを眺めて暗闇に消え去るという行動をとっている。ここに見られる主人公の婚約者に対する思いと行動は、象徴的な意味を示唆する。すなわち、植民地朝鮮の民族の置かれた現実、運命として背負う「義務」であると表明していることであり、そのためにどのような道があり得るか、その実行の模索として主人公の家出は意味付けられていると考えられる。

13) ノ・ヨンソク『モダンの誘惑、モダンの涙—近代韓国を歩く—』考える木出版、2004年1月、146頁では、米豆市場は1899年、朝鮮に入ってきた日本人が仁川に建てた米豆取引所で日本向けの米を確保するための総督府による増産計画に便乗し、1910年代末の取引量は日朝合併当時に比べて10倍の390石に至るほど景気が良かったと写真入りの説明をしている。

1-4. 「墓場」の朝鮮

『生まれ出づる悩み』の作品の結末は、文学者のいる東京にも、画家青年が奮闘している北海道にも「北国の厳冬を牛のように忍耐強く辛抱」し抜いた末に訪れる「永久の春」が到来するという希望につなげている。一方、『暗夜』の結末は、涙を溜めて暗夜に消え去る主人公の姿が対蹠的に提示されている。

主人公の二度の散歩の場面では、つぎの引用文に見るように市場と朝鮮の王宮であり、主人公が周囲の「人間界」をどのように見て捉えているかを知ることができる。

若干明快な気分で家を出た彼は夜照岷市場付近の雑多な人混みの中を眉間を寄せながら通りぬけた。…(中略)…只今その雑多な人々の間を通り抜けたのにも、自分が人が生きる人間界にいるような思いは少しも起こらなかった。最も醜悪な、今にでも倒れそうな魍魎のうごめく、白い煙の中を掻き分けて流れるような思いであった。…(中略)…「一体、あなたたちは何故にそのように奔走しているのか？いつまでこれを繰り返そうとしているのか？…(中略)…一二町歩いたか、彼はふと振り返り光化門に眼を留めてひとりてに心の中で叫んだ。

「墓だ！」…(中略)…「何が人間大事か！弔いになら、ともかく！」と従兄弟の家の門を通り越した。(53頁)

彼は部屋で食事を済ました。今日は少し酒を引っ掛けた。彼はお酒でほてる体で風に当ろうと家を出た。スウーと頬を撫でる秋風に愉快的気分になる。西十字路の角を曲がり、景福宮を眼にしなから家の前の道を下っていった。終着駅の電車が吐きだす餓渇と疲労にうろつく人影が、一人二人と消えていくのと同時に六曹大路には、暮れていくに連れて高くぶら下がっている電灯の光が、墓前の灯籠のように、薄い夕暮れのかすみに灯る。彼は遠く空を見上げた。

込み上がる思いに体全体で泣きたかった。……空想がまた彼を占領する。

——彼は心の中で叫んだ。(中略)

——彼はよろめく足取りを気にしながら、無限に伸びている大きく広い光化門通りの太平路を一步一步足を踏みしめながら歩き出した。(57-58頁)

作品の結びは、朝鮮王朝の景福宮及び宮門である光化門を眺める主人公の思いで閉じられている。市場での俗衆を「魍魎」のように捉えて、朝鮮王朝の象徴の景福宮を「墓場」のように捉えている。引用文は、景福宮の前の電灯を「墓前の灯籠」として朝鮮最後の王の国喪を思わせる記憶に繋がっている。

ここには「電灯」という当時の近代化の波の繁華な都市化の風景はなく、朝鮮王朝の終焉のみが見届けられている。そしてその前の大路の暗闇に消える主人公の歩みは、前

近代の朝鮮王朝の終焉を見届けて終わるが、つぎなる朝鮮近代の姿は描かれない。そして、今の「電灯」を持ち込んだ日本による朝鮮の植民地化が暗闇として暗示されており、そこに作者の時代認識の一端を見ることができる。

以上のように、主人公の結末で見せる歩みの姿は、『生まれ出づる悩み』と対蹠的であり、このことは朝鮮の現実認識、朝鮮の近代、すなわち日本による近代化の現実に対する作者の視座と見ることができる。主人公が婚約者に対する「愛さなければならない義務」を背負うと言いながら、暗闇の道へ歩いて消えていくところには、若い世代に背負わされた植民地近代という朝鮮の現実を引き受ける思いの表明と言え、その具体的な模索の道は不透明であることを「暗闇」という象徴で示している。

II 『標本室の青蛙』（1921）－「新家庭」に込められた近代の可能性

帰国1年後に『開闢』に発表された『標本室の青蛙』は、廉想渉のデビュー作として文壇の反響が大きかった話題作であり、近代小説の「起源」となる作品である。¹⁴⁾

物語の語り手である主人公の私は、『暗夜』の主人公の心の内を展開している人物と言え、考える気力を喪失している『暗夜』の主人公から、一步出ようとする動きによって引き継がれ、『暗夜』の続編的な様相が見られる。¹⁵⁾さらに、もう一人の人物として金昌億という狂人が登場しており、主人公が狂人になった金昌億の人生を突き止める過程に「朝鮮の現実」が浮き彫りになる構図となっている。

このような二人の関係は、有島武郎の『生まれ出づる悩み』の二人の人物の関係、つまり文学者の語り手が、漁夫の青年画家に見せる共感に相似しており、『暗夜』に引き続き『標本室の青蛙』も『生まれ出づる悩み』の作品世界の磁場の中で展開していると見受けられる。

特に金昌億という人物の造形には家族関係という側面が絡まっており、朝鮮の現実と家族問題がどのように位置付けられているのかを見ることができる。

本論では、『暗夜』の主人公同様、『標本室の青蛙』の日本帰りの知識人の

14) 金允植、前掲書、139頁において「1921年5月に書かれ、1921年8月から10月まで3回にかけて『開闢』に連載された。この作品は、金東仁の中篇『心の弱い者に』と併せて、韓国近代小説の起源を明らかにする作品として検討が必要である」と述べている。

15) 李・ボヨン、前掲書では、『暗夜』より1年後に書かれた『標本室の青蛙』の“私”の絶望的精神状況であるデカタンスを克服する可能性を得るまでの彷徨の過程における、主人公の名前の記号“X”と浮浪者的な性格及び生に対する倦怠的な態度などから、『暗夜』の続編としての『標本室の青蛙』の特徴を指摘している。

「七、八ヶ月間」の悩みが曖昧であるという指摘に注目したい。16) 主人公と金昌億の二人の人物に背負わされている役割は何か、語り手の私が、何について悩んでいるのか、そして狂人金昌億の個人史が何を意味するのか、その家族史的な様相について見ていくことにする。

2-1. 青年の「世界の果て」への旅

主人公は京城の自分の家に閉じこもっている。帰省後の七、八ヶ月間に「死体」のような心身の閉塞状態で見たと自殺じみた死への衝動の夢と、そこから出なければならないという欲求に苛まれている。そのさなか、友人に誘われて京城を出て、北の都の平壤へと旅に出る。

主人公の家から出たいと願う理由は、「新しい空気」、「新しい刺激」を求めてのことであり、そのために主人公は「世界の果て」まで「永遠に出る」などと言っている。注目すべきは、この閉塞状況から出たいという願望は、主人公だけではなく、仲間の友人などの青年たちに共通する思いであり、当代の青年たちの願望として「新しい世界」への希求が想定されている点である。

何故、家を出るのか、その具体的な理由は曖昧である。「形式に陥ったすべて」を否定するとか、また「父親に宣言した」ということから、旧い事象を捨て、新しい事象を願う思いであると推察することができる。

さて、以上のように旅に出る時の心境と同時に、旅先が重要な示唆を与えている。

平壤行の汽車に乗った時には、一旦別れていたAも再び一緒になった。大きく重そうなトランクを汽車の荷棚に載せてから、ヒューと溜息をつきながら座った。YはAに目をやりながら言った。

「もう、永遠にか」「うん、……ま、永遠にというところだ」……

「しかし、平壤が世界の果てかも知れないね。ハハハ」（中略）

「A君は、今日父親に宣言をし、永遠に出るそうよ」とYが説明をする。「ハハハ、それは羨ましい限りだね」と私は言いながら、Aの顔を見つめた。Aは顔をまっすぐにし、座りなおしながら、照れたようにニヤッと笑って見せた。（30頁）

引用文には、「世界の果て」、「永遠」という形容が見られ、「新しい意義」の追究はたやすくはないことを示している。友人の一人が言う「しかし、平壤が世界の果てかも

16) 金・ハンシク「現実の具体性と近代の主体の成立」、前掲書、479頁において、「初期3部作で廉想渉は20年代始めの若い知識人が“どのように”悩むかを見ることができる。狂か、狂に至るまで苦悩する知識人の姿を比較的成功的に描いていると言える。しかし、それが“何”に対する悩みなのかは解りにくい。」と述べている。

知れないね。」という言葉は、作品の結末と関係し、平壤は作者が植民地朝鮮の現実を、朝鮮の近代をどのように見ているかを示唆する象徴的な場所となっている。

主人公及び友人たちは、平壤に住む狂人と言われる金昌億を訪ねて旅立つ。平壤は、この旅行の目的の「新しい世界」のための模索の場所となっている。さらに狂人金昌億は、青年仲間たちの願望を投射している人と言える人物で、家から出て、果ても無く放浪に赴く青年たちのこれからの行方に、一つのモデル的存在として、示唆を与える人物である。

2-2. 平壤・大同江での「夢」が示す時代認識¹⁷⁾

京城を立ち平壤に着いた主人公と友人は、金昌億のいる南浦に赴く前に平壤の中心市街とその周囲を流れる大同江周辺を歩く。大同江の川辺に沿った名所の二尖峰の浮碧楼、乙密台の楼上を見物し、西の都であった遺跡の城壁で、昼寝をして夢を見、午後南浦に向かうのであるが、つぎの引用文のようにこの大同江での主人公の足取りには、平壤の歴史と絡んだ朝鮮時代の認識を示唆する作者の視線がある。

歯磨きをしている人、タオルを絞って顔を洗う人が目に入った。私は足を止め、無心に眺めていたが、気持ち良さそうな江水に自分も手を浸けてみたくなり、浅い水辺を選んで座った。… (中略) …

私は朝日を受けてキラキラと光る水面を暫く眺めて「水は偉大だ」と心で叫んでみた。… (中略) この時、後ろの方向から長髪の者が、こちらの方へ近づいてくるのが見えた。(中略) … 形象はまるで東京付近で見た芸術家ではないか思われるほどであった。(中略) … 彼も私達の手のように江水に浸けては、手で水を汲みうかがいが終わったかとおもいきや、ぬっと立ち大同門に向い歩き始めた。(15頁)

引用文に見る大同江の水辺の光景は、歴史に生きる人間の姿の一齣として描かれている。主人公が水に浸ける手は、歴史に参与する一齣であり、そのことは「水は偉大だ」と呟く主人公の認識に託されている。一人の乞食を見て「真正な幸福はあのような生活にあるのだ」と思う主人公の視線には、平壤の近代化の波と乞食の生を生み出す近代化の力学の矛盾を思う作者の視線がある。

このように平壤の風景を時代と関わる暗喩として見る主人公の視線は、浮碧楼と乙密台で見留めた風景を見た目と同様である。

17) 平壤は西北朝鮮最大の平野を背後に、川幅500m以上の大同江岸の高台に位置し、古くから軍事上の要塞の地であった朝鮮最古の都市。大同江が東から大きく回って綾羅島をはさんで市の中央部を南流している。李朝時代の平壤は小地域だったが、植民地時代、軍事施設中心の市街地が、そして大同江岸に工場地帯が拡大した。伊藤亜人編『朝鮮を知る事典』平凡社、1986年3月、383-385頁

浮碧楼内に掛けられた夥しい数の日本人の「名札」の陳列と、途中、壁に彫られている朝鮮人名を対比し、人間の「遺房百世」を願う共通の思いに打たれるが、朝鮮人の名に対しては、いったい「誰に見てほしいのか」という問いが発せられ、民族の将来を確約できない朝鮮人としての「自己存在」を懷疑している。同様に、乙蜜台の台上でも、日本名の「呉服屋の広告のベンチ」に目が止まり、主人公は無力感に打たれる。西側の城壁に体を凭れて考える気力もなく「夢」に誘われるが、この「夢」は「夢」という無意識の衣裳を纏いつつ、主人公がどのように時代に向き合うべきかを問い、「自己存在」への意義を考えさせている。

はっきり覚えていないが、……多分、お米で餅を作ろうとしたのだろう、だけど餅にならないと言って……とにかく白い粉を被った手のまま、縁側をうろうろしながらもう死ぬ時が来たと、家の戸を全部締め切り手ぬぐいを首に巻いて横になったんだ。そうしたら、どこからか、女性と思われる骨だらけの白い手が音もなく近寄ってきて手ぬぐいの両端を締め付け始めるではないか。…(中略)…初めて経験する快感であったが、しかし何故こんなに早く死ななければならないのかと、体を振ると目が覚めてしまったのさ——。(17頁)

引用文には、死への衝動と生への願望の二つの様相がある。死への衝動は、閉塞状態の京城の家で見た夢の延長線上にあり、今度は、「何故こんなに早く死ななければならないのか」と疑問をぶつけている。ここには、死の衝動に駆られた京城での夢の意味から、死ぬべきではないと、生への願望が表わされている。

この「夢」が示唆する内容は、「餅」、「家」、「手」、「女性」、「白」というキーワードで解くことができる。「餅」は朝鮮の近代化の作業を、「戸を締め切った家」は近代化の失敗を意味する。「手」は主人公が大同江の偉大な水に「手」を洗う場面と共通し、夢の中で主人公の餅を作る「白い粉を被った手」などの一連の「手」の形容は、歴史に参与するという意味を持つ。

このような夢の内容が示唆するのは、朝鮮民族は、近代化の作業の失敗で、死ぬべき運命にあるが、朝鮮民族の青年には、まだ生きる可能性も残されているという希望をも託されている。その手掛かりを探る一端を担うのが、平嬢の近代化の波の中を生き、狂人と言われる金昌億である。

2-3. 「三階建ての洋屋」が示す可能性

金昌億の特徴には、過去と現在の二つの構成軸がある。主人公金昌億と直接会ってなした対話を通して明らかになる現在と、金昌億の狂人になるまでの過去の道程である。まず、ここでは、主人公が訪ねてなした直接の対話を通して浮び上がる金昌億の現在の姿

を見る。

主人公にとって金昌億は、先生と学生、先輩と後輩というふうには、併合後の先輩世代の問題を集約する象徴的な人物である。

「(前略) 狂人！——いえ、いえ、自由の民を目の前にし私は驚かないわけには行きません。現代のすべての病いを油釜に集めて入れ、煮て煎じ詰まって釜の底に残る懊悩の丸薬が、最後にジージーと燃えつきる音のような、我々の欲求を一人で具現した勝利者のように見えるのです。……」(中略)「……私は今、泣いているのです。すべての細胞が、歡喜と懊悩の間で飛び回るほどの嬉しさに……」(30頁)

主人公は金昌億を「現代のすべての病い」を凝縮して見せる人物として捉えている。金昌億は「現代のすべての病い」を探り、解剖し、そして「自由」を手にした「勝利者」として、主人公を含む青年らの「我々の欲求」を一人で体現している人物である。しかし、問題は朝鮮の近代的「自由」を具現した「勝利者」の金昌億が「狂人」であると言われる点であり、朝鮮における近代の歪みを象徴している。

主人公の先輩世代に当たるこの人物の人生は、朝鮮近代化の波の申し子として位置付けることができ、彼の父母の死、妻の死、再婚した妻の家出は、朝鮮近代史の節目に照合している。そして、「自由」を可視化したのが金昌億の建てた「三階建ての洋屋」である。

その「三階建ての洋屋」に住んでいる金昌億はつぎのように述べている。西洋文明は、「欧州大戦」(第一次世界大戦——引用者注)の例に見るように、弱肉強食の大原則が原因で、世界が争うようになり、物質や金銭万能の時代となった。その「物欲」のせいで、人は仁義礼智も、五倫もなくなった結果、父子兄弟が反目し、夫婦の不和が生じ、隣と隣が、村と村が、そして国と国が争うことになったと、西洋文明の弊害を述べている。欧州大戦は「神の火の審判」として批判し、それ以後の目指すべき方向性は、東西が親睦することであり、世界が「一大家庭」を築いて行くべきだとして、その実践として西洋の二階建てよりも上の「三階建ての洋屋」を建て、東西親睦会を置き紛争を監視しているのだと金昌億は言う。

このように金昌億の口を通して語られる西洋文明の弊害と、それを乗り越えるための新しい世界の試みとしての「三階建ての洋屋」であったのだが、それは狂人金昌億の幻想に過ぎず、その実際の姿は「ぼろ小屋」であった。

2-4. 金昌億の個人史と朝鮮歴史

金昌億の今に至る過去の30余年の個人史は、主人公の先輩世代、「三・一独立万

歳運動」を主導した世代が朝鮮の近代化のためにたどった歴史的道程に重なっている。18)

彼の父は商売を営み資本主義近代化への移行の波の中を生きる。伶俐な少年であった金昌億は勉学のために青年期を京城で過ごしている。その金昌億に悲しい出来事がつぎつぎと起きる。父の急死、そして母も亡くなる。父母の死亡の年代を歴史の年代と照合してみると、1904年日露戦争、1905年の日朝保護条約による朝鮮の保護国化とという出来事と重なっている。金昌億と妻との関係を見ると、一度目の妻は死亡し、ついで二度目の若い妻を迎え再婚し家庭を為すが、二度目の妻は家出をするなど、金昌億の家庭は壊れ続ける。19)

このように金昌億の人生の行路は、時代という波が関わっていて、そこで問題となるのが妻の欲望である。妻は、金昌億が「不義の事件」——「三・一独立万歳運動」——で四、五ヶ月の獄中生活を送っている間に家出をする。そのことで金昌億は精神の異常を来たす。

妻の家出が、欲望、性欲のためであり、はじめ平壤の洋服者へ行き、そして「遊廓」へ身を落とす流れとなっている。狂い出した金昌億は「遊廓」の町の隣に「三階建ての洋屋」を建て、妻の帰りを待つのだが、ここには日本による朝鮮の近代化としての「遊廓」と、それを見守る意味での「三階建ての洋屋」が関連している。

柳町の暮れ行く荒野、遊廓からは細くて長い三味線の音、鈍くて遠くまで広がるチャングの音（朝鮮の楽器——引用者註）は、早く、あるいはゆっくりと、停車場へ向かう我々の足元を、いつまでも追いかけてきた。暗く侘しい北邙の冷たい風に、あの家で四肢を縮ませた体を預けている彼は、あのチャングの音を、天国のワルツか、それとも地獄の阿鼻叫喚として聞いているのか。（29頁）

引用文の「遊廓」の描写の中に、日本の楽器である三味線と朝鮮の伝統的な楽器のチャングと一緒に奏でる音の意味は、併合後の朝鮮の近代化の姿を示している。その音が「天国のワルツ」になるか「地獄の阿鼻叫喚」になるかという問いは、併合後の朝鮮

18) 金允植、前掲書、153頁。金允植は「6章から8章までに渡る金昌億に関する長い分量は蛇足に過ぎない。ここでは、作中話者の私がなく、作家が全知全能な3人称の全知的視点に立って金昌億が狂い出す内歴を叙述している。また叙述も新派調である」と指摘しているが、この点是有島武郎の二つの作品（『生まれ出づる悩み』『石にひしがれた女』）との比較が必要であると考え。脈略の飛ぶ金昌億の個人史の挿入は、『除夜』の崔貞仁の人物を叙述する方法にも共通して見られる方法として、廉想渉の人物の描出の特徴をなす初期形態として注目すべきであると考え。

19) このように作者は、1910年の日本による併合前（父母の死）、併合（妻の死）、併合後（再婚）というふうには、人物と歴史的歩みとの照合に意味を持たせており、3年後に書き始められる作品『万歳前』において、「三・一独立万歳運動」の失敗が「妻の死」に重ねられていることと相似している。

の今後を問うている。

このように併合後の近代朝鮮の可視的な姿が「遊郭」で比喻されている点を、金昌億の妻が「遊廓」へ至ったことと合わせて考えると、日本による近代化が、朝鮮民族の墮落に結びつく可能性を危惧していると思えることができ、遊郭の近くに建てられた、吹き飛ばされそうな三階建ての「ぼろ小屋」は、「自由」を具現した朝鮮近代の姿として仮に見ることができる。

2-5. 旅の帰着点が示すもの

主人公の「世界の果て」までを願った旅の終着点は、北寒にある村である。寒村は、主人公の「人生の全局面」を俯瞰する抽象的な場所として、また主人公の思索は、植民地朝鮮の今を生きる青年の「自己存在」のあり方の答えとして描かれている。

金昌億の行方はどうなのか。友人の手紙から知らされるのは、「三階建ての洋屋」が焼失し金昌億の行方も不明であるということである。そして火を付けたのは金昌億自身かも知れないと、「三階建ての洋屋」の試みを無にした意図を友人はあれこれ詮索する。可能な解釈は「神意」に基づいた「信念」に従い、俗世を離れ金剛山に入ることを実行に移したのだと友人は語る。

手紙を読み進める主人公は、一層の「鬱積」に耐えかねて部屋を出る。いつも赴く絶壁を逍遙する彼の姿と、そこで出会う風景は、生死を分けるぎりぎりの極限の状況を示す。

その絶壁の上に経つ四方八方を塞ぎ光線も入らない「ぼろ小屋」について村人は、「この村で生まれた者は、誰もがそこを通して天国に行く默契になっている」と言う。ここに主人公は、「人生の全局面を俯瞰した」意味があると悟る。

この「ぼろ小屋」が朝鮮の近代という「新しい世界」を作るために主人公がなした思索の果ての答えである。「絶壁」に建てられた「ぼろ小屋」は、朝鮮近代の最後の姿として、「そこ」を直視しないで「自己存在」は問うことはできない。ここに見る主人公の「自己存在」の有り様として、民族を抜きにした朝鮮近代は見出せないという作者の時代認識が託されている。民族の発見、これが旅の答えであったのである。

結末に金昌億の行方について、蛇よりも嫌う「平壤……彼の妻の実家のある平壤」で「乞食」になって江辺を逍遙していると、つぎの引用文のように推察されている。しかし、彼は結局平壤へ来た。……平壤は彼の二番目の妻の実家があるところだ。——

一年十二ヶ月、開けてみることもなく占められた普通門の外に、寝場所の藁塊の中で、何かをもぐもぐ食べたり、或いはその前の普通江のところを逍遙したりしている彼は、大同江辺の長髪客と兄弟、乞食に思うだけで、彼が誰であるかは誰も知らなかった。(47頁)

近代の申し子としての一人の青年が、「乞食」になって、大同江を逍遙する姿は、「ぼろ小屋」までも焼失する朝鮮の近代人の最後に行着く姿と言える。併合され植民地となった現在の朝鮮においては、朝鮮の民が具現する「自由」の姿は、家を持つことが不可能で、乞食や狂人となって彷徨うしかない姿である。

金昌億の平壤入りは、家を失い乞食になっても、平壤を諦めないことを意味している。平壤は、日本化されているが、朝鮮の民族の近代を取り戻すための砦で、主人公及び青年達が追い求めた新しい「世界の果て」は、民族の砦としての平壤であり、物語の結末は平壤を取り戻すことに置かれていることは、南浦並びに平壤の近代歴史と人物を照らして合わせてみると、金昌億が南浦で「狂人」となり、結末で「乞食」となって平壤入りすることは示唆的である。²⁰⁾

一人の青年が、どのようにして「狂人」「乞食」になっていくのかを見せてくれる金昌億の30余年の個人史は、朝鮮の近代化の激動的な歩みを集約して見せ、家における出来事が彼を狂わせていく出来事と連動している。そして金昌億が建てる「三階建ての洋屋」の「新家庭」は、朝鮮人の手による朝鮮人のための家を可視化した意味として提示し、その「新家庭」が不成立に終わる朝鮮民族の近代史の断層を示している。

まとめに

日本植民地下の1920年から1924年の時期は1919年「三・一独立万歳運動」が失敗に帰し、民族が絶望感にひしがれていた時期である。このような時代の気運の中で廉想渉は初期作品を世に問うている。

初期作品に登場する主人公の多くは日本帰りの知識人の青年男女である。彼らを通して1920年代の若い知識人たちが如何に生きるかという問いかけが家族葛藤を通して描かれており、その葛藤の内容は併合下を生きる朝鮮民族の新しい生の可能性を問う方向に向けられている。

20) 『暗夜』と『標本室の青蛙』はそれぞれ、朝鮮歴史の中心の首都を問題的空間として描かれていると言える。金昌億という人物造型において、「狂人」になるまでの舞台背景である南浦、そして結末の平壤入りには、作者が歴史的意味を託していると考えられる。もとは一寒村であったが、荷南浦は平壤南道南部の港を中心とする工業都市として、日清戦争のとき日本艦隊が停泊港として利用したことを契機に平壤市の外港にあたる貿易港として発展することになった(伊藤亜人篇『朝鮮を知る事典』平凡社、1986年3月)。平壤工業地帯の核心地としての南浦は、親日的な政策のため、日本色が強かった。1920年代中頃には日本人が人口の三分の一を占め、20余りの工場、果樹園など95%以上が日本人に占められていることについて、当時の雑誌『開闢』が話題にしていたほどであったとする(ノ・ヨンソク『モダンの誘惑、モダンの涙—近代韓国を歩く—』考える木出版、2004年1月、244頁)。

『暗夜』において日本帰りの知識人主人公を通して廉想渉が問うているのは、今を生きる朝鮮人の「真理」とはいったい何かという問題である。主人公は有島武郎の『生まれ出づる悩み』の主人公の「自己」＝「人類」の一人として自覚めることへの認識に理解を示しつつ、自分にとって「真理」とは「義務」としての民族の一員であることという結論を導き出している。併合後の日本への「同化」が進む朝鮮近代の現状において、廉想渉は民族を背負って生きることを「義務」とする知識人を提示し、親世代の「家」から出る主人公の姿で前近代的な価値の終焉と訣別の意味を託している。

つぎに『標本室の青蛙』では、『暗夜』の前近代を意味する「家」から出た主人公のつぎなる探索として、植民地となった現在の朝鮮の近代化への歩みを振り返る作業が行われている。主人公の現在の閉塞状況がどこから由来するのかを問う旅行が朝鮮の近代化への旅路と重ねられている。また登場人物の「三階建ての洋屋」を建てる試みが「ぼろ小屋」に転落し、果てには「家」を失い乞食となる過程には朝鮮の近代化への歩みが示唆されている。この「ぼろ小屋」は、朝鮮が前近代から出て、近代化へ進んできた今、かろうじて保持されているが、それもいつ失うかも知れない民族の生の把握となっている。

以上のように廉想渉の初期作品では、前近代的価値を批判する知識人男性が民族を背負い生きる「義務」のために、家を出る——新しい家の創出を試みる——が、「ぼろ小屋」であったという構図によって、民族の新しい生の模索過程が集約されている。家父長社会の歪みに対する強い批判に加え、近代の「精神」がどのように成立するのか、その過程が掘り下げられている。

【参考文献】

* ここには参考にした文献の韓国語名も併記した。

- 金慶洙 『廉想涉長編小説研究』 一潮閣、1999年2月、86頁
- 김경수 『염상섭장편소설연구』 일조각
- 金允植 『廉想涉研究』 서울大学出版部、1987年1月、139頁・153頁
- 김윤식 『염상섭연구』 서울대학출판부
- 金禹昌 「リアリズムへの道」 『廉想涉全集初期短篇』 第9卷、1987年、437頁
- 김우창 「리얼리즘에의 길」 『염상섭전집9』 민음사
- 金・ハンシク 「現実の具体性と近代的主体の成立」 『廉想涉小説研究』 金種均編、
国学資料院、1999年1月、479頁
- 김한식 「현실의 구체성과 근대주체의 성립」 『염상섭소설연구』 김종균편, 국
학자료원
- 노・ヨンсок 『모던의 誘惑、모던의 涙—近代韓國を歩く—』 考える木出版、
2004年1月、146頁・244頁
- 노용석 『모던의 유혹, 모던의 눈물—근대한국을 거닐다』 생각의 나무
- 李・ボヨン 『乱世の文学』 (廉想涉論) イェリム企画、2001年3月、10頁
- 이보영 『난세의 문학-염상섭론』 예림기획
- 張・ソクジュ 『20世紀韓國文学探検1900~1934』 シゴン社、2000年、172頁
- 장석주 『20세기 한국문학의 탐험1900-1934』 시공사
- 伊藤亜人篇 『朝鮮を知る事典』 平凡社、1986年、383頁-385頁

要 旨

廉想渉は日本に併合され10年目が過ぎる地点で独立の望みも不透明になった状況において、朝鮮の現況を、近代をどのように眺めていただろうか。本論では韓国近代文学の近代性がどのような様相で貫徹されているかを知ることのできる作家とされる廉想渉の初期の二作品『暗夜』（1922）『標本室の青蛙』（1921）に描かれた人物達の家族をめぐる葛藤を通して、「近代」日本と朝鮮の近代の間の狭間の時代認識の捉えることを課題とした。分析軸は作品に描かれた家族的な事象を具体的に見ることにより、植民地下をどのように生きるかという時代認識の様相を探った。

廉想渉は『暗夜』において日本帰りの知識人主人公を通して、「真理」とは「義務」としての民族の一員であることという結論を導き出している。また併合後の日本への「同化」へ向かう朝鮮近代の現状において、民族を背負って生きることを「義務」とする知識人を提示し、親世代の「家」から出る主人公の行動を通して前近代的な価値の終焉及びそれとの訣別がなされている。

つぎに『標本室の青蛙』では『暗夜』の前近代を意味する「家」から出た主人公のつぎなる探索として、植民地となった現在の朝鮮の近代化への歩みを振り返る作業がなされている。主人公の現在の閉塞状況がどこから由来するのかを問う旅が朝鮮の近代化への歩みと重ねられ、登場人物の「三階建ての洋屋」を建てる試みが「ぼろ小屋」に転落し、果てには「家」を失い乞食となる経路には、家を出る——新しい家の創出を試みる——しかし「ぼろ小屋」であったという民族の生の拠点を模索していた。この「ぼろ小屋」は朝鮮が前近代から出て近代化へ歩んできた今、かろうじて保持されているがそれもいつ失うかも知れない民族の生の把握となっている。

キーワード：植民地朝鮮、知識人、家、新家庭、京城、平壤

투 고 : 2007. 5. 31
1차 심사 : 2007. 6. 9
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (361-272) 충청북도 청주시 흥덕구 복대2동 2008 삼일아파트 102호
電 話 : 02-236-6136
e-mail : chaeyoungnim2005@yahoo.co.kr